

北海道にどのような外材が輸入されているか

沢田 豊

わが国における外材輸入の歴史は古く、これまでも外材について、いろいろの角度からとりまとめられた資料が出されている。とくに最近、近年の外材ラッシュを反映してその数は非常に多くなっている。しかし外材を利用する立場から、これらの資料に漫然と目を通したのでは知識の整理が難しく、活用もされにくい。できれば、われわれに直接関係する樹種のみを重点的にとりあげ、これらについての知識を集中的に吸収する方がより効率的であろうと考えた。そこで、われわれに最も関係の深い現在北海道に輸入されている外材は、どのような種類で構成されているかについて調べてみることにした。

本道にどのような樹種が、どの国から、どれくらいの数量入っているかを厳密に調べ上げるのは大変な

仕事で多くの時間と労力が要求される。今回は止むを得ず、40年の通関統計による生産国別内訳および属別内訳と生産国における樹種別分布、蓄積から輸入外材の種類を類推する方法をとった。

1 南洋材について

輸出ラワン合板の不振とは別に輸出道材合板も諸種の問題を内抱し、先行き楽観を許さない情勢にあるが、現在のところ数量的には一応伸びており、単板用材として南洋材の輸入も着実に増大している。本道における輸入南洋材は全国の3.7%で少ないが、北海道の合単板原木に占める割合は、39年度で28%、40年度には35%近くに達するものと予想され、合板工業に占める南洋材のウエイトは逐年大きくなっている。また

第1表 昭和40年(1~12月)ラワン材国別輸入実績(大蔵省通関統計による)

国名	北海道			全国		
	数量(m ³)	金額(千円)	数量(%)	数量(m ³)	金額(千円)	数量(%)
タイ				(16) 1,046	(384) 9,509	—
マレーシア連邦マラヤ州	2,481	22,136	0.7	(230) 65,012	(4,191) 577,309	0.7
マレーシア連邦シンガポール州	(19) 19	(386) 386	0.1	(19) 8,584	(386) 86,771	0.1
マレーシア連邦サラワク州	19,495	172,430	5.6	338,430	3,034,367	3.8
マレーシア連邦サバ州	153,350	1,366,326	44.8	(71) 2,719,659	(3,705) 24,828,277	30.7
ブルネイ				5,401	52,550	0.1
フィリピン	152,903	1,494,988	48.8	(504) 5,604,890	(7,001) 55,384,000	63.4
インドネシア				78,781	561,682	0.9
カンボジア				16,552	135,846	0.2
葡領インド				2,620	27,936	—
ピスマルク諸島				3,459	33,449	—
ニュージーランド				1,615	15,315	—
ソロモン群島				1,641	12,373	—
その他(台湾, 南ベトナム, ノルウエー, 米国)				(397) 511	(7,835) 10,497	—
計	(19) 328,248	(386) 3,056,266	100.0	(1,237) 8,848,201	(23,502) 84,769,881	100.0

注: 1) 上欄()は製材および加工品で内数である。(素材換算は行なっていない)
2) 本表はラワン, アピトン類その他フタバガキ科の木材を総括したものである。

南洋材は本道輸入木材の過半である52%を占め、輸入木材としても軽視し得ない存在となっている。

本道に輸入される南洋材は合板用、とくに道材合板のコア材を主たる目的としており、製材に供されている南洋材は合板用原木として輸入されながら、たまたまこれらに混入されてくる合板不適材が振り向けられたものであるというのが実情のようである。したがって輸入商社においても、材の美観より安価で加工しやすい材の確保に重点をおいているため、本道における南洋材はいわゆる赤ラワンのグループより白ラワンのグループが主流をなしているようである。

これら南洋材は、どこの国からどれくらい入っているのだろうか。40年の実績（第1表）によると、フィリピンおよびレッド・セラヤ、ホワイト・セラヤ、イエロー・セラヤ、カプール、クルイン、セランガン・バツなど主要林木としているサバー（北ボルネオ）の両国からだけで総体の94%が輸入され、そのほかサラワク、マラヤから若干入っているに過ぎない。現在のところごく限られた国からのみ輸入されている

といえる。

ここで念のため触れておくが、第1表に示すラワン、アピトン類のほかに、全国的には製材、単板用丸太として、いわゆる南洋材が第2表のごとく輸入され

第2表 昭和40年南洋材国別輸入実績
(ラワン、アピトン類以外の製材、単板用広葉樹丸太)

国名	数量 (m ³)	金額 (千円)
南ベトナム	16	933
タイ	1,224	41,106
マラヤ	11,069	74,477
シンガポール	1,846	16,361
サラワク	266,461	1,992,499
サバ	69,192	422,385
ブルネ	243	1,693
フィリピン	6,695	95,735
インドネシア	39,082	303,182
西ニューギニア	4,002	33,271
カンボジア	1,024	7,468
インド	4,940	444,951
北東ニューギニア	10,661	87,944
ビスマルク諸島	41,498	352,325
ソロモン群島	13,860	101,851
ピルマ	7	326
セイロン	22	2,316
計	471,842	3,978,823

注：大蔵省通関統計による。

第3表 ラワン類の各グループにつけられた各王国での呼び名

国名	名 称				
サラワク ブルネ	レッド・ メランチ	ウラト・マタ	ダークレッド・ メランチ	イエロウ・ メランチ	ホワイト・ メランチ
北ボルネオ (サバ)	レッド・セラヤ	ホワイト・セラヤ	ダークレッド・セラヤ ダークレッド・ メランチ	イエロウ・セラヤ イエロウ・メランチ (セランガン・クニン) セランガン・カチヤ	メラビ
マラヤ	レッド・メランチ (ライトレッド・ メランチ)		ダークレッド・ メランチ	イエロウ・メランチ	ホワイト・メランチ
フィリピン	ホワイト・ラワン アルモン マヤビス* ホワイト・ラワン	バクチカン	レッド・ラワン (レッド・ラワン) (タンギール)	イエロウ・ラワン (カランチのみ)	イエロウ・ラワン (マンガシノロなど)

*ピンク・ラワンと呼ばれたり、レッド・ラワンに含まれることもある。

注：須藤謙詞：最近の主な南洋材，木材41年1月号より引用。

ていることである。数量はラワン、アピトン類の5.3%と少ないが、加工上種々問題となる樹種はこの中に多く、今後これらの材の比重が高くなることが充分予想される。

なお、ここに一般には比較的あいまいに用いられている南洋材およびラワン材についての定義を引用する。“南洋材という場合、一般には「アジアの南方地域、すなわち、インド、インドシナ半島、インドネシア、フィリピンにかけて産出する木材」を意味する”。また、**熱帯材**(Tropical Timber)という場合は、“南洋材と呼ばれる東南アジアからの木材のほか、中、南米、アフリカ、その他の亜熱帯、熱帯地域からの木材”を含む非常に広域な木材を指している。

南洋材の意味で南方材という呼び方もするが、文字の印象と内容とが必ずしも一致せずあまり適当ではないのでなからうか。南洋材というラワンを想起するほどフィリピン産のラワン材が南洋材の主役であったが、厳密に言えば**ラワン類**とは「フタバガキ科のうち3属、Parashorea Pentacme および Shorea などからの木材のうち、やや軽軟、ないし重硬なもの」を総括したフィリピンにおける呼び名である。このラワンとほとんど同じ意味で、北ボルネオ産のものは**セラヤ**と呼ばれ、サラワク、ブルネイ、マラヤ産のものは**メランティ**などと呼ばれる。

また、一般市場では材の色調によってグループ分けしていることが多い。すなわち、ラワン類については、赤ラワン、黄ラワン、白ラワン類などによる。産地により各グループの名称がどのように異なるかを示したのが**第3表**である。

2 ソ連材について

戦前からわが国、とくに北海道の製材およびパルプ材として北洋材は重要な役割を果たしてきたが、戦後貿易が再開されたのは昭和29年で、南洋材、米材に比べ相当遅い。その後日ソ通商条約の締結などにより本格的輸入が促進され、順調な伸展をみせている。しかし地域的にみるとわが国の太平洋岸地域は、取引上の諸問題、材質、価格などの点で、それまでのソ連材が米材にとって替られ、ソ連材のほとんど大部分は裏日

本、北海道地域に集中されている。

ソ連との輸入契約における用途別分類は、一般材パルプ材および特殊材となっており、**一般材**は工業用および建築資材に向けられる針葉樹丸太で、樹種はエゾマツ、トドマツ、カラマツ、ベニマツ、欧州アカマツなどである。**パルプ材**(パランス)は一般材に適さない下級のものが振り向けられ、樹種は主としてエゾマツ、トドマツで、欧州アカマツ、カラマツ、ドロヤナギ、白楊なども含まれる。**特殊材**はパイリング(打込み用杭丸太)、製函用材、割材、製材などで、カラマツ、欧州アカマツなど針葉樹のほか、白楊、ドロヤナギなどの広葉樹も少量含まれている。

本道におけるソ連材の品目別輸入実績は第4表のとおりで、輸入ソ連材の57%はパルプ用材であり、これはわが国輸入パルプ材の25%に相当する数量である。パルプ用材として輸入されたものから製材用原木に廻されるもの、またその逆の場合もあると考えられるが、一応本表に掲げられた数量がパルプ材に向けられたとしても道内パルプ原木需要量の5~6%でその占める割合は低い。

一般製材用原木として輸入針葉樹材(ソ連材、米材)の占める地位もパルプ材同様高くないが、輸入製材用針葉樹の70%がソ連材であるところに本道の特色がある。製材用原木として輸入されたソ連材の樹種構成をみると、モミ、トウヒ属が78%を占め、カラマツ、マツ属などの丸太は少ない。ソ連における森林の樹種別蓄積からみて、モミ、トウヒ属の大部分はエゾマツであると考えられる。同様にソ連極東地域におけるマツ属の7割までがベニマツであるところから、輸入されるマツ属のほとんどはベニマツで欧州アカマツは少ないものと思われる。またカラマツ属の代表はダフリカ・カラマツでこれにシベリア・カラマツが加わっているようである。輸入カラマツの用途は杭丸太が中心であり、製材工場としては、エゾマツ、トドマツをより多く望んでいるため、輸入商社も一般的にはカラマツを嫌っている。しかしソ連におけるカラマツの蓄積は全体の1/3を上廻っており、今後ソ連材の輸入をより発展させるためには、用途を杭丸太などの土木用材に限定することなく、この材質を考慮した多方面の用途

第4表 昭和40年ソ連材主要品目別輸入実績 (大蔵省通関統計による)

品名	北海道			全国			
	数量(m³)	金額(千円)	数量(%)	数量(m³)	金額(千円)	数量(%)	
素材	N バルブ用材	114,358	691,939	49.1	476,323	2,788,593	18.0
	L バルブ用材	17,811	82,944	7.7	50,948	241,819	1.9
	マ ツ 属 丸 太	5,595	46,597	2.4	495,226	4,361,688	18.8
	モミ・トウヒ属丸太	78,803	658,989	33.8	1,043,773	8,898,915	39.6
	カラマツ属丸太	15,779	116,369	6.8	400,261	3,045,893	15.2
	N その他丸太 ¹⁾	546	4,964	0.2	95,297	87,667	3.6
	ドロノキ類丸太				18,759	165,469	0.7
	L その他丸太				409	1,980	—
	杭丸太 ²⁾				9,434	85,549	0.3
	枕木				740	5,220	—
素材小計	232,892	1,601,802	(100.0)	2,591,170	20,412,793	(98.3)	
製材	マ ツ 属 製 材				29,147	335,069	1.1
	モミ・トウヒ属製材				13,797	176,627	0.5
	カラマツ属製材				1,425	16,343	0.1
	製材小計				44,369	573,039	(1.7)
ソ連材合計	232,892	1,601,802	100.0	2,635,539	20,990,832	100.0	

注：1) Nその他丸太の主な内訳は、北海道の場合、ヒノキ属396m³、ネズコ属150m³で、全国の場合、ヒノキ属6,646m³、ネズコ属3,637m³、トガサワラ属651m³である。
2) 杭丸太には、杭木、支柱、打込み丸太、その他丸太を含めた。

開発が必要となる。

ソ連材はまた北洋材ともいわれる。これは「大正の中頃から南・北カラフト、千島、沿海州地区の日本海に面している各地の広い地域から積出されるエゾ、トドマツを主体とし、その中にベニマツ、カラマツの若干%を混入して日本各地に輸送された丸太材を一括して北洋材と慣称して、現在に及んでいる」ものである。しかし、現今のソ連材輸入の実態からみて北洋材というよりソ連材と呼ぶのが、より妥当と思われる。

3 米材について

わが国の市場において一般に米材と呼ばれるものは、北米の太平洋岸諸州、すなわち北はアラスカからカナダのブリティッシュ・コロンビア、米国のワシントン、オレゴンおよびカリフォルニアなど各州の西部地方から産出され、しかもわが国で一般用材として用いられる材の総称である。したがって特殊用途に向けられるウォールナットやインセンス・シダーなどは米材に含めないのがこれまでの通例である。

長大材、高級材を主体に戦後再開されたわが国の米材輸入は、36年にいたり前年の55万m³(輸入外材の

8.6%)に対し221万m³(輸入外材の22.9%)と驚異的な増大をみせた。これは高度成長政策による設備投資の活況と飛躍的な経済成長による著しい木材需要の増大、さらに国産材の供給不足による木材価格の続騰などの要因によるが、北海道においては、これらの影響が即輸入外材の増となっては現われず、本州にみられるほど顕著な増加を示していない。したがって米材に対する依存度も低く、40年の外材輸入量に占める米材の比率は8%に過ぎない。

これを品目別に見るとほとんどが一般材であり、樹種的には、シトカ・スプリースの丸太および製材が輸入米材の59%で大半を占め、トガサワラ属の17%、モミ、トウヒ属の12%がこれに次くほかは、マツ属、ツガ属などの丸太が若干入っている程度である。トガサワラ属は米松といわれるダグラス・ファーのみからなると考えてよく、シトカ・スプリースを除くモミ、トウヒ属の主体はノーブル・ファーおよびグランド・ファーであると見なされるが、このほか北米西部に分布するエンゲルマン・トウヒ、マリアナ・トウヒ(ブラック・スプリース)、ホワイト・ファー、パシフィック・シルバー・ファー(アマビリス・ファー)など

も含まれているのであろうか。またマツ属に入る主要なものはウェスタン・ホワイト・パインおよびボンデローザ・パインであり、ツガ属のそれはウェスタン・ヘムロックと思われる。シトカ・スプルースがこのように多い理由は明確でないが、北海道の郷土樹種であるアカエゾマツの代替となる高級材であるところから、これまでの通産アカエゾマツの需要基盤がそのま

ま生かされていることによるのだろうか。

つぎに米国産針葉樹の呼び名について触れておく。わが国におけるほどではないが、米材の樹種名も非常に混んとしている印象を受ける。すなわちバルサム・ファアがシルバー・パインと呼ばれたりホワイト・スプルースと呼ばれたりするように樹種名と属名との関連に必ずしも一貫性がないことである。しかし一般

第5表 昭和40年米材主要品目別輸入実績（大蔵省通関統計による）

品名	北海道			全 国				
	数量 (m ³)	金額 (千円)	数量(%)	数量 (m ³)	金額 (千円)	数量(%)		
素 材	マ ツ 属 丸 太	3,004 (3,711)	31,392 (49,262)	5.7	23,521 (57,333)	344,404 (904,238)	0.6	
	シトカスプルース丸太	20,833	228,793	39.6	210,539	3,502,639	5.0	
	モミ・トウヒ属丸太	6,315	69,833	12.0	216,993 (4,023)	3,420,568 (61,030)	5.1	
	ヒノキ属丸太				214,896 (43,326)	4,728,811 (677,760)	5.1	
	ツガ属丸太	2,886	35,950	5.5	2,335,624 (54,875)	28,680,238 (678,565)	55.1	
	ネズコ属丸太	126	1,553	0.2	71,403 (983)	1,057,547 (14,913)	1.7	
	トガサワラ属丸太	9,115	126,840	17.3	328,309 (1,640)	4,172,886 (21,742)	7.7	
	その他 N 丸太	8	227	—	6,703 (1,193)	122,772 (13,228)	0.2	
	ドロノキ類丸太				56,429	148,225	1.3	
	アメリカンブラック ウォールナット丸太				6,634	973,707	0.2	
材	その他 L 丸太				1,176 (1,898)	25,010 (25,457)	—	
	杭 丸 太 ²⁾				18,437 (632)	314,068 (13,092)	0.4	
	枕 木				632	13,092	—	
	素 材 小 計	(3,711) 42,287	(49,262) 494,588	(80.3)	(165,903) 3,491,296	(2,410,075) 47,503,967	(82.4)	
	製 材	マ ツ 属 製 材				1,865 (18,491)	90,340 (325,067)	—
		シトカスプルース製材	10,341	135,253	19.7	173,058	2,496,737	4.1
		モミ・トウヒ属製材				(12) 72	(152) 1,710	—
		ヒノキ属製材				(15,575) 15,575	(270,329) 270,329	0.4
		ツガ属製材				(390,567) 447,610	(5,557,110) 6,336,647	10.6
		トガサワラ属製材				(20,815) 48,212	(302,076) 694,776	1.1
インセンスシダー製材					19,953 (30,096)	525,227 (349,936)	0.5	
その他 N 製材					32,425 (329)	361,619 (5,146)	0.8	
N 加 工 材					619 (317)	7,578 (14,338)	—	
L 製 材		49	6,660	—	5,762 (55)	475,537 (6,347)	0.1	
L 加 工 材				69	8,885	—		
製 材 小 計	10,390	141,913	(19.7)	(476,257) 745,220	(6,830,501) 11,269,385	(17.6)		
米 材 合 計	(3,711) 52,677	(49,262) 636,501	100.0	(642,160) 4,236,516	(9,240,576) 58,773,352	100.0		

注：1) 上欄 () はカナダから輸入されたもので内数である。

2) 杭丸太には、支柱、打込み丸太、電柱、その他丸太が含まれている。

的にいえることは**パイン** (pine) という場合は本来マツ属 (Pinus) のものを指し、同じマツ科のモミ属 (Abies)、トガサワラ属 (Pseudotsuga) などのものが時にパインと呼ばれる。同様に**ファー** (fir) はモミ属、およびトガサワラ属、**スプルース** (spruce) はトウヒ属 (Picea)、**ヘムロック** (hemlock) はツガ属 (Tsuga)、**シダー** (cedar) はヒノキ科のヒノキ属 (Chamaecyparis)、ネズコ属 (Thuja) およびシヨウナンボク属 (Libocedrus) など、**サイプレス** (

cypress) はスギ科のものを指す (シダーとサイプレスはあまり明確に使い分けられていないようである) と考えて良いようである。

なお、本道にはこれらのほか、40年にインドネシアからパルプ材としてメルクシマツ3,947m³、ニュージーランドからモンタリーマツ6,722m³などが輸入されている。

参考までに、40年の港湾別輸入実績を第6表に掲げる。

第6表 昭和40年木材輸入実績総括表 (大蔵省通関統計による)

品名	北 海 道							計			全 国		
	港 湾 別 数 量 (m ³)							数 量 (m ³)	金 額 (千円)	数 量 (%)	数 量 (m ³)	金 額 (千円)	数 量 (%)
	小樽	室蘭	苫小牧	函館	釧路	稚内	留萌						
ラワン材	(19) 102,651	120,084		15,987	76,449		13,077	(19) 328,248	(386) 3,056,266	52.2	(1,237) 8,848,201	(23,502) 84,769,881	52.3
ソ連材	37,440	82,492	14,706	19,123	25,646	11,863	41,622	232,892	1,601,802	37.0	(44,369) 2,635,539	(578,039) 20,990,832	15.6
米材	(49) 7,951	(10,341) 32,779		4,208	4,735		3,004	(10,390) 52,677	(141,913) 636,501	8.4	(745,220) 4,236,516	(11,269,385) 58,773,352	25.0
ニュージーランド松	1,908			1,146	3,668			6,722	58,195	1.1	400,962	3,586,860	2.4
キリ ³⁾											(2,530) 6,106	(88,545) 159,747	—
リグナム バイター ⁴⁾											1,152	140,671	—
チーク											(906) 5,402	(104,232) 454,578	—
その他	(40) 2,724		3,947		2,125			(40) 8,796	(738) 67,754	1.3	(163,943) 786,675	(2,051,406) 8,435,459	4.7
計	(108) 152,674	(10,341) 235,355	18,653	40,464	112,623	11,863	57,703	(10,449) 629,335	(143,037) 5,420,518	100.0	(963,205) 16,920,553	(14,115,109) 177,311,380	100.0

- 注：1) 上欄 () は製材および加工品で内数である。
 2) 札幌税関支署扱いの米材8m³ (227千円) を小樽に含めた。
 3) キリの大部分は台湾から輸入された台湾桐 (Pauionia Kawakamii) である。
 4) 中南米 (メキシコ、ドミニカなど) で産し、船舶用スクリューの軸受部分に用いられる。

4 むすび

所期の目的に反し、極めて常識的なことから再確認する程度の内容に止まったが、以上述べてきたように、現在北海道に輸入されている外材は、数量、種類ともあまり多くなく、輸入先も限定されている。しかし年々増大する木材需要と本道の限られた森林資源、さらに積出国における木材事情の変化などを考え合せると、好む好まざるにかかわらず、将来とも外材輸入量は益々増大するであろうし、これに伴って外材の

輸入先、樹種、材種とも多種多様になることが当然予想される。このような事態に対処するためにも、輸入材についての認識を一層深めることの必要性が痛感される。

主な文献

- 1) 林野庁監修：木材貿易の知識、(1965)。
- 2) 須藤輝司：熱帯材の識別、林試報、No. 157、(1963)。
- 3) 早坂不二雄：今後の北洋材、山林、No. 973 (昭40.6)。

- 林産試 企画科 -